

てん りゅう がわ

火がかりの竜天

平沢清人・作 北島新平・絵



天竜川のかがり火



平沢清人・作
北島新平・絵



N. D. C. 913/268p/22cm

新少年少女教養文庫 57

天竜川のかがり火

1973年3月29日 第一刷発行

定 価 680円

著 者 平 沢 清 人

発行者 牧 芳 枝

発行所 株式会社 牧 書 店

東京都新宿区揚場町1

電話(269)2081~4 振替・東京196483

印刷所 塚田印刷株式会社

製本所 ナショナル製本所

(分) 8393 (製) 06057 (出) 7909

© Kiyoto Hirasawa 1973 Printed in Japan

もくじ

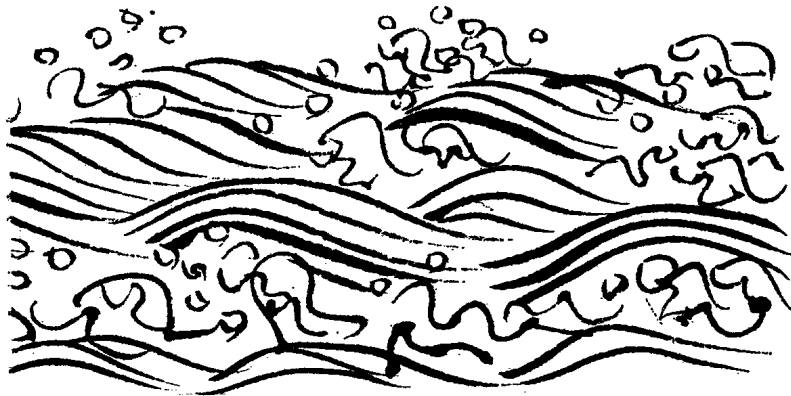
はじめに

第1章 最初の失敗

1	寺小屋と新太たち	2
2	大願寺の寄合	12
3	猪兵衛たちの入牢	25

第2章 計画と準備

1	めん密な計画	48
2	お師匠さまの講談	58
3	猪兵衛、和田宿で伴助に会う	72
4	全南山の足並をそろえて	95



第3章

一 揆き

1	かがり火に映える天竜川 てんりゅうがわ	110
2	飯田藩の役人に阻止される そし	123
3	飯田藩の百姓、町人の温かい手 あたた	137
4	奉行にむしやぶりつく伴助 ばんすけ	146
5	わが家へ.....	162

第4章

一 揆の結末けつまつ

1	餅も門松もないさみしい正月 もち かどまつ	176
2	奉行がかわる ぶぎょう	196
3	天領相場の要求は通った てんりょうそうば ようきゆう	209
4	小前騒動 こまえそうどう	232
	その後の伴助 ばんすけ	255
	あとがき.....	258



第1章

最初さいしよの失敗しつぱい



1 寺小屋と新太たち

安政二年（二八五五）四月の終わりの朝であつた。

当時は、太陰曆（満月の時がいつも十五日になるようにきめたもの）なので、現在の曆より約一か月おそく、今でいう五月の中頃である。

新太は、友だちの佐市といっしょに、大平のお師匠さま（猪兵衛さま）のところへ行つた。お師匠さまのところというのは寺小屋のことである。

そのころは、今のようには小学校というものがなかったから、寺小屋といって、今でいう塾のようなどころで、子どもたちは読み書きや、そろばんを教わっていたのである。

新太も佐市も、その時、数え年の十一歳であつた。

ここ南山（現在の長野県飯田市竜江、千代・桑草村と上久堅の一部）は、三方が山に囲まれて、見渡す目の先にならず山の姿があつた。

南山というのは、戦国時代に旗本の知久氏の城があつた「神の峯」の南の山村地帯であることから、南山郷と呼ばれたといわれているが、この南山には三十六の村があり、六千人余りの人が住んでいた。

しかし、中には一戸しか家のないような小さな村があつたので、小さな村を集めて一つの組合村を作り、大きな村は分けて、合計九つの組合村というのが作られていた。

新太は、三十六か村の中でも一番大きい今田村下組（今田村は大きいので、上組、中組、下組に別れていた）に住んでいた。

猪兵衛さまの寺小屋も、同じ今田村下組にあつた。

寺小屋には、みんなそろうと十四、五人の顔ぶれだったが、今日は五人しかいない。たぶん、まだ農繁期でないといいても、田起こしなどがはじまったのだろう。

「なんだ、今日はこれだけか。じゃあ佐市、おれの横にこいよ。」

新太が声をかけると、

「はいはい、いわれなくてもそのつもりだよ。」

と、佐市は道具をかかえて「どすん」と新太の横にすわりこんだ。

「おらも行こ。」

春吉が、ひよいひよいと机を飛びこして佐市のとなりにくると、しげんに五人はかたまつて

しまつて、いつものことながら、勝手なおしゃべりがはじまるのである。

「みんな、墨はすれたかの。」

お師匠さまが顔を出した。

みなは、あわてて墨をすりはじめた。

すれた者は、お師匠さまに書いてもらったお手本を見ながら、まっ黒くなった練習帳の上に字を書いて行く。てかてかと黒く光っている練習帳の上に新しい筆のあとは、くつきりとうき出してよく見える。

「幸作は、またいちだんとうまくなったの。」

お師匠さまが幸作の横に立つて、じつと手の動きを見ながらいった。

「おらたちだつて、幸作ぐらいになったら、うまくなるじゃ、なあ新太。」

すかさず、佐市が憎まれ口をきく。幸作は五人の中で一番年上なのであった。

しばらくして、戸口の開く音がすると、同時に何人かの人のはいってくる気配がした。

「あ、ちよつと用があるでな、みんな静かに自分自分でよく手習いしておけよ。」

お師匠さまは、そういうと机の上をさつと片づけ、一人一人の練習帳に目をやり、静かに部屋を出て行かれた。

「だれだ？」

「知らね……。」

「おれ、見てこようかな。」

「見つかつたらしかられるぞ。」

お師匠ししやうさまが出て行つてから、しばらくは手習いをしながらのひそひそ話であつたが、やがて春吉が、べつと新太の顔に墨すみをぬつたのがきつかけとなり、

「こいつ、やつたな。」

と、新太がすばやくぬり返し、佐市がそれに加くわつて、ついには筆ふでを持ったままで三人は部屋の中をかけ回る騒さわぎをはじめた。

「静しずかにしろ、お師匠ししやうさまにしかられるぞ。」

幸作が注意したが、そんなものは耳にはいるはずがない。

「へっへっへ、いい顔じゃ、おまえのおとう、そっくりじゃ。」

「なにを、こいつ。」

おとなしいさわのをのぞいて、まるで飛とんだりはねたり、どたばたと大騒ぎである。

「おら、小便しょうべんに行つてくる。」

急に佐市が外に飛とび出して行つた。

「佐市、にげるのか。じゃあ新太、一対一たいたぞ。」

「ああ、かかってこい。」

いつの間にか部屋へやの半分の机つくえは、すみの方に押しやられて、二人は取っ組み合いである。
「……おい、……やめろ。」

いつの間に帰ってきたのか、佐市が声をひそめていった。

新太と春吉は、びっくりして飛び起きた。

「しっ、しっ。」

と、佐市は指ゆびを口にあてて、首をすくめてみせる。

「なんだ、佐市。」

「どうしただ。」

「あのな、おれ、小便しょうべんに行った帰りに、奥おくの離れはなをのぞいたんじや。そしたらな、新太、おまえのおとうがいたぞ。」

「えっ、おとうが。」

「それから、下村しもむらの又右衛門またえもんさまもな。みんな、なんや、くそまじめな顔して話しとるんだ。ところか、おまえの聲が聞こえるじゃないか、おれ、びっくりして帰ってきたんだぞ。」

新太と春吉は顔を見合せて舌したを出した。

「だいぶ聞こえたか、佐市。」



新太が心配そうに聞いた。

「ああ、だが、心配するほどじゃないさ。」

「おら、騒ぐのやめた。」

新太は大いそぎで机を片づけはじめた。

「おらもやめた。新太がおとうにしかられると、かわいそうだからな。」

佐市も、春吉も、めいめい机に向かって手習いをはじめた。

手習いというより、まるでたつぷり墨をふくませた筆を、黒い紙の上になすりつけているといったふうである。

新太のおとうは文助ぶんすけといって、村の使い走りえいしというか、連絡係りのようなことをやり、猪兵衛いへさまの相談相手そうだんあいてでもあった。

また、猪兵衛さまの土地の小作人こさくじんでもあるが、新太の家では、田んぼも蚕かいこも、ほとんどお、あが一人でやっていた。

やがて、お師匠ししやうさまがはいってこられた。

「どうもすまんかったの。今日はこれで終わりじゃ。あしたは大願寺だいがんじで南山三十六か村よりあの寄合

いがあるでの、寺小屋は休みにするぞ。」
といって、新太と佐市のところへきた。

「どうじゃの、静かに、よく習えたかの。」

お師匠さまは二人を見て笑っていった。

「へへへ……。」

二人は同時に頭をかいて笑ってしまった。

春吉が、ペロリと赤い舌を出した。

「さあ、早くお帰り、よく手伝いするんじやぞ。」

お師匠さまは、しようなない腕白坊主ども
ににが笑っていた。

「さいなら。」

「お師匠さま、さいなら。」

みなは、ペこりペこりと頭をさげると、わ
れさきにと寺小屋を飛び出して行った。

「佐市、あしたどうする？」



帰り道で新太は聞いた。

「大願寺だろ、もちろん行くさ。でも新太、呼びにきてくれよ、うちのおかあうるさいんじや。」

「うちも同じじや。じゃあ、あした、わすれるな。」

佐と別れると、新太は一目散に家に向かつてかけ出した。

家では、おかあや妹のよねが、もう昼飯を食べているかも知れない。新太は畑の中を走りぬけた。

猪兵衛さまは、大平部落で寺小屋の先生をしているので、村の人から「大平のお師匠さま」と呼ばれていた。

当時、八幡（現在の飯田市松尾）で漢学の塾をやっていたこのあたり一番の学者、松尾享庵の弟子である。

享庵は若い頃、京、大坂などへ勉強に行き、学者仲間にも多くの友人があつた。天保の飢饉の時には、自分のたいせつな本を売り払って、困っている人びとを助けたりしている。

また享庵は、自分は役人でありながら、困っている人たちのために米蔵を開いて人びとを助け、だれもが幸福に暮らせる世の中を作るために兵を挙げた大塩平八郎のやり方をほめ、弟子たちに、たびたびその話を聞かせた。

猪兵衛^{いへえ}さまは、その享庵^{きやうあん}に教えを受けた弟子^{でし}であり、若い頃には江戸^{えど}へも勉強に出かけられ、南山三十六か村第一の知恵者^{ちえしや}といわれた人であった。

しかも猪兵衛さまには、学者によくある高ぶったところがなく、深い考えを持つ物静^{ものしず}かな人であったから、村人たちは猪兵衛さまを尊敬^{そんけい}していた。

寺小屋に集まる新太たちもまた、勉強はあまりすきではなかったが、お師匠^{ししやう}さまは大すきであつた。

2 大願寺の寄合だいがんじよりあ

翌日よくじつ きぬうれきは旧暦きうれきの五月一日であつた。

伊那山脈いなさんみやくがくつきりと美しい。新太しんたは朝のうちおかあの手伝てつだいをして水をくんだりしたが、陽ひが高くなつたので、そろそろ家を出ようとした。すると、おかあが次つぎと用をいいつけそうにしたので、思い切つて飛び出とすと、佐市さいちを呼びよびに行つた。

「佐市、どこへ行くんだ、遊んどっちゃだめだぞ。」

佐市のおかあも、新太のおかあと同じことをいった。しかし、二人は目でうなずきあうと大願寺だいがんじに向かつてかけ出した。うしろで佐市のおかあが何やら大声でいつていたが、二人はふり向きもしない。

大願寺だいがんじは、同じ今田村下組いまだむらしもみにある。二人が石段いしだんをのぼって行くと、すでに大人たちが大勢集おおぜいあつまっていた。いそがしそうに、あちこち歩いている人、煙草たばこをすっている人、話している人、